

本学に「人権講座」を

—宋富子さんのひとり芝居
「身世打鈴」が問いかけたもの—

加山 久夫

去る6月8日(火)13:00～14:30、キリスト教研究所主催により宋富子(ソン・プジャ)さんのひとり芝居「身世打鈴(シンセタリョン)」が白金校舎3号館で公演され、出席した多くの聴衆に深い感動を与えた。

奈良県の被差別部落に生まれ育った在日韓国人二世として受けた民族差別は彼女から生きる希望を

奪い、小学校3年生の頃から自らの生命を呪って死ぬことばかりを考えさせたという。「身世打鈴」（身のうえ話）は宋富子さんのそのような52年の個人史であるが、それはまたひとりの少女の生命を、ただ韓国人であるがゆえに、押しつぶそうとした日本人の歴史でもあるといえよう。幸いにして、30歳のとき、聖書との出会いが彼女の心を開き、自己として生きること目覚めさせる。そして、痛み、苦しみを愛と許しによって乗り越えさせる。

私はキリスト教研究所に寄せられた約150人の出席者の感想文を読む機会を得たが、多くの方々が日・韓の歴史やわが国における民族差別について無知であったことの恐ろしさと、それを知った者の責任について述べておられたことは嬉しいことだった。キリスト教研究所は先に5ヶ年のプロジェクト「人権とキリスト教」のまとめを公刊したが、計画の当初から本学に人権講座を開設することを目指してきた。それがどのような形で実現することが望ましいのかはこれからの検討の課題であるが、それが遠からず現実のものとなることを心から希う者である。

因みに、宋富子さんは、わが国に朝鮮文化や歴史を紹介するための博物館を設立する運動（「高麗博物館をつくる会」）のために、このひとり芝居を全国で公演しておられる。

日本と朝鮮の間には、豊かな文化の交流があり、日本は朝鮮から実に多くの文化的寄与を受けてき

た。その影響史を探れば言語や陶芸や音楽など実に広範多岐に亘りわれわれの周辺に今なお息づいている。しかし、他方、朝鮮に破壊と荒廃をもたらした秀吉による侵略をはじめ、40年近くに及ぶ日本による朝鮮の植民地化の歴史を通して、両国はほんとうに遠い間柄になってしまった。そしてわが国の「内なる朝鮮」も。このような歴史の明暗両面の事実を正しく知ることこそが、過ちの清算と新しい関係の基礎であるとの認識からこの運動は始まった。この運動に参加していただける方は筆者までご連絡いただくか、直接、「高麗博物館をつくる会」（〒206 東京都稲城市東長沼1086 稲城教会内、電話0423-78-5245あるいは0423-77-5559）にお問い合わせ下さるよう、この機会を借りてお願いしたい。

（かやま ひさお

所員、一般教育部教授）